

はじめに



私がある日本語コースで初級を終えたばかりの中級レベルの読解クラスを担当することになったとき、「ある読解教材を第1課からそのまま順番にそって教える」という、いわゆる教科書を教える授業をしていました。学習者からの授業後のフィードバックも特に悪いものではなく、そのまま続けることもできたと思います。そこで当時思ったことが、「学習者は教材やこちらの質問に答えているだけで、ちゃんと理解できているのだろうか?」「読解って淡々と教材をこなしているだけでいいのだろうか?」という疑問でした。実はChapter01で述べている教師の悩みというのは当時の私の想いそのものです。

そんなときに思い出したのが「再話」でした。学習者がある文章を読んで何をどう理解したのかは目で見ることはできません。学習者が的確に理解できているかどうかを知るには、外に出してもらい、つまり話してもらい書いてもらうしかありません。「再話」自体は、Chapter02で述べるように特に新しい手法ではありません。英語教育ではよく用いられていた活動で、私自身90年代に英語教育のワークショップに参加したこともあります。

「再話」について考え始めていたところに偶然出会ったのが卯城(2009)『英語リーディングの科学——「読めたつもり」の謎を解く』で、副題の「読めたつもり」というのがとても印象的でした。その中で、「再話」は「ストーリーを読んだ後に原稿を見ない状態でそのストーリーの内容を知らない人に語る活動」と定義され、教授活動として紹介されていました。しかし、私の担当していたクラスは初級を終えたばかりで、知識としては一応、初級文型を勉強していますが、それらを使って話したり書いたりすることは十分にできず、2、3行のまとまった文章すらまだ読んだことがない学習者がほとん

どでした。非漢字圏の学習者も多かったので、漢字が入っているだけで読む作業がなかなか先に進みませんでした。そのため、お互いに知らない素材を読んで理解したことを相手に話すという活動をそのままクラスに導入することが難しい状況でした。

そこで思いついたのが、「ペアで同じ素材を読んで、知らない相手に話すつもりで話す」という活動で、本書での「ペアによる再話活動」の原型が生まれたのです。

当時、最初にこの活動を実践したときの情景をはっきり覚えています。30人程度のクラスでペアになって読んだ内容を話しますから、ものすごくにぎやかというか、急にうるさい授業になりました。ところが、学習者が読めているのか読めていないのか見えずぐにわかりますし、何がわからないのかもすぐにわかりますから、コントロールさえできれば人数が多くても効率的に対応ができます。学習者も自分の理解を自分のペースで話せるからか見るからに楽しそうでしたし、自分でわからない語彙や文法、内容について主体的に調べたり、相手に聞いたたりして、お互いに助け合って読んだ内容を自分なりに再構築して、おもしろそうに話している姿が見られました。その結果、受講者の数がほとんど減らず、最後のフィードバックにもこれまでと違い「楽しかった」という表現が多く見られました。当時は初めての試みで、Chapter27に示したようなチェックリストはありませんから、ほとんどやりっ放しに近かったと思います。ただ、ICレコーダーで再話活動を録音して聞いていたので、実践としての手応えは感じていました。

そんなときに出会ったのが木谷さんと熊谷智子さんでした。たまたまこの実践の話をしたら、「それ、おもしろいんじゃない?」ということになり、いっしょに学習者間のやりとりの分析

が始まり、学習者が読んだ内容を2人で伝え合う中で非常に興味深い相互行為が観察され、それが学習者の内容理解につながっている様子が確認できました。

次の学期はここを修正して、次の学期は読む文章を変えて……というように、実践をしては改善を重ね、最終的に本書で紹介した3つの段階を取り入れた「再話活動」になったというわけです。

この間、いろいろなところで発表や報告してきましたが、現場の先生方からは私が読解の授業を始めたころの想いを同様に感じていることを耳にし、現状の問題や悩みを解決するために「再話を取り入れてみたい」という声をいただきました。短い発表時間だけではなかなかその中身を伝えることは難しいと感じていました。

一方で、実践の分析を進めていく中で、「再話」が従来型の読解の課題を解決する突破口になるのではないかと感じていました。「学習者はちゃんと理解できているのだろうか」という問いに答えるためには、「読んで理解する」だけではなく、「読んで理解したことを自分の言葉で話す」ことが必要なのです。なぜなら、読んで理解したことを自分の言葉で話すことができなければ、読んで何をどのように理解したのかを確認することはできないからです。みなさんも、読んで理解したはずなのに、相手に話そうとしたら「あれ、どうだったっけ？」と話せなかったという経験はないでしょうか。まさに「読んだつもり」になっているだけなのです。

このように「読んで話す」という「再話活動」は、日常生活でも当たり前のように行われていて、「読む」と「話す」が切り離されて独立しているのではなく、「読んで話す」ことを通して初めて自分の理解が確認されるのであり、「読む」と「話す」は相乗効果となって向上していくのではないのでしょうか。だからこそ、クラスでは、「問題を解くための読解」ではなく、「日常生活での読みにつなげる」、つまり、「読んでわかったことを相手に的確に伝える」という目

的で読む練習をすること、そのために素材を変えて繰り返し「再話活動」をすることで、読む力だけでなく話す力を同時に伸ばそうと考えたわけです。

以上から、本書に私たちが考える現段階での「再話活動」をまとめることで、読解授業に「再話活動」を導入する意義と可能性について世に問うことにしました。

本書に著わした「ペアによる再話活動」は、初級レベルの日本語コースを終えたばかりの、まだまとまった文章をしっかりと読んで内容を理解することがそんなに簡単にできない日本語学習者が、次のレベルに進んで、自分が理解できたことを他の人に伝えることを通して、自分が理解したことを再確認したり、自分の体験を結びつけたりすることができるようになるために、教室活動としてこのような活動も可能なのではないかという、1つの提案であって、まだまだ課題があります。

具体的な課題については、本書の中で述べていきますが、私たちが何をどのように考えて実践し、改善を繰り返していったのか、そのプロセスを詳細に記述し共有することによって、さまざまな現場において課題解決に向けた実践が行われ、その結果がお互いに報告、共有され、より良い読解活動につながっていけばと願っています。

2020年4月
小河原 義朗